

第 1 回中間報告

(報告期間 2015 年 9 月 21 日～12 月 16 日)

基本情報

派遣クラブ：広島東ロータリークラブ
カウンセラー：市川 太一 先生
受け入れホストクラブ：Rotary Club of Streatham
カウンセラー：Mrs. Chan Bisessar

国際ロータリー第 2710 地区
2015-16 年度グローバル補助金奨学生
大平勇也

報告書提出日：2015 年 12 月 16 日
教育機関・専攻分野：キングスカレッジ・ロンドン
中東学部紛争解決コース (修士課程)
MA Conflict Resolution in Divided Societies in the Middle East and
Mediterranean Studies Programme at King's College London

学業面での成果：専攻する学科について

9月下旬から12月初旬まで英国のキングスカレッジ・ロンドンにて修士課程の第一セミスターを受講いたしました。今回の報告では第一セミスターを終了したまでの留学の感想を中心に記したいと思います。私が入学の許可されたキングスカレッジ・ロンドンは1829年に創設された英国で4番目に歴史のある大学です。学生数は21,300人とロンドン大学群では最大規模の大学でもあります。著名な卒業生としてナイチンゲールやアパルトヘイト撤廃に尽力した大主教ツツ、近年ではヒッグス粒子の存在の予言でノーベル賞を受賞したヒッグスが挙げられます。所属する中東学部紛争解決学科には15人前後の生徒が在籍しています。また中東学部全体では約50人の生徒が在籍し、必修である紛争解決の授業は学部内で同じモジュールを受講する形式です。生徒のバックグラウンドは蒼々たるもので、現役のジャーナリストの方が多く、大学教授の方や、大使夫人の方など中東外交に関わりのある方や、既にキャリアを積み重ねている方が多く在籍されています。よって、私のように学部から直接進学している学生は少数派といえます。授業の進行形式ですが、講義を聞いて学ぶというより議論をすることに重きが



(写真) 中東学部や英文学部が入る Virginia Woolf Building。Virginia Woolf はキングスカレッジ・ロンドンの卒業生で20世紀前半の小説家。

が置かれたコースです。また、必修の紛争解決の授業は5名の教員によって指導されていたので、生徒と教授の間の距離が近いのも特徴です。そのため同学部が毎週開催する特別講義の後には軽食会があり、その際には「論文のことよりも今はお酒を飲んで政治話をしようじゃないか。」と盛り上がり、お酒を含んだ議論は毎回授業以上に白熱します。

生徒の国籍に関してですが、米国と英国を含むヨーロッパの学生と中東地域出身の学生で構成されています。いわゆる東アジアからの学生は学科では私一人で、中東学部全体でも英国在住の韓国人の生徒が一人いただけでした。この環境は確かに困難の伴うものではありませんでしたが、言い換えれば議論に対してユニークで、中立な立場から挑むことができる環境といえます。そのことにより自分の意見を発言できたことに対しては充実感を感じています。議題の中心は中東の人種間の対立を含むセンシティブな内容ですので、発言により怒りを買いかねませんし、そのことはむしろ覚悟する必要があったように感じます。しかし、覚悟を決めた上で自分の正しいと思うことを論理立てて主張することが自分の最大限に出来ることですので、可能な限り授業ではそれを堂々と繰り返していました。

やはり 1 年間という限られた留学期間ですので、とりわけ教員に対して、発言を通じて自分をアピールしようとはいつも心掛けています。そのような思いから上記のような特別講義への参加や学部のパーティー、パブでの飲み会へは常に参加しました。このように積極的に学部に係わり続けたことは学業面の成果の一つと言えるかもしれません。授業内容は現在メディアを通じて頻繁に報道されるシリア内戦の他、イラン革命、アフガン戦争など中東情勢全般を扱います。第一セミスターで私が受講した授業は必修の「分断された社会における紛争と共存可能性」の他「パレスチナ紛争の歴史」と「ジハードや革命に関するイスラム主義運動について」でした。それぞれ 5000words のエッセーを作成する必要がありますが私は常にパレスチナ紛争をケーススタディーとしてエッセーを作成しています。これは私が大学卒業後に東京の駐日パレスチナ常駐総代表部でインターンをする機会を頂いたことと、実際にイスラエル・パレスチナ（ヨルダン川西岸）を訪れたことがあるからです。これまでもすでにパレスチナ人の民族自決に関するエッセーを提出しました。研究テーマを絞ることが後の論文作成の深い考察にもつながることからも今後もパレスチナ紛争に焦点を絞り研究を進めていこうと考えています。



(写真) ロンドン出発の当日、パレスチナ大使邸にてパレスチナ大使の通訳をする機会をいただきました。

学業面での成果：課外活動について

キングスカレッジ・ロンドンにはロンドンの中心に位置する大学ですので学期中は、毎日のように興味深い公開レクチャーが開催されています。また中東学部に隣接するロンドン・スクール・オブ・エコノミクスでも参加可能な政治に関する学術イベントが多く開催されていたので中東問題に関するレクチャーに参加したりしていました。また大学では毎週ディベート部のトレーニングセッションに参加しました。私は日本の学部時代からディベート活動に下手なりに携わっていたので、ディベートの本場イギリスでそのような活動に参加が出来ること自体、私にとって大きな喜びです。課外活動を通じて新たな友人を作ることが出来るので、人間関係構築のためにも参加はプラスに働いていると思います。ディベート部の他にも学科で学習しているパレスチナ紛争に関する学生団体のレクチャーにも時間があれば参加をしています。学問分野の性質上、このような課外活動への参加すべてが学業面に大きく影響しているように思います。ディベートのスキルは

授業の議論で役立ちましたし、パレスチナ紛争に関するレクチャーへの参加は、紛争に関する見識を深めることができる上、パレスチナ出身の学生とお知り合いになることで、テーマに対する覚悟；モチベーションに繋がりました。このことから第 2 セミスター期間中も課外活動への参加は時間が許す限り継続したいと考えています。

受け入れ地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流

これまで 2 週間に一度くらいのペースでロータリー関連のイベントに参加させていただいています。10 月下旬にはイングランド南部の海岸沿いの街、イーストボーン (Eastbourne) にて国際ロータリー第 1130 地区 (ロンドン地区) の地区大会に参加する機会を頂きました。奨学生は日本人の方が多く、普段日本人の方と集団でお話する機会がないので大変貴重な時間となりました。日本人の奨学生の皆さんは英語がお上手で、各々の学術分野に関してエキスパートであり、地区イベントに参加する度に自分も頑張らなければと強く感じさせられます。



(写真) Eastbourne 地区大会での自己紹介の場面。隣は同じ 2710 地区からの奨学生の藤村さん。ロータリーのイベントでお会いする際にはいつも親切にしてくださいませ。

受け入れ先クラブ (Rotary Club of Streatham) の Chan 様は、日頃から優しく私を気遣ってくださり、本当に感謝に尽きません。Chan 様は私の修士課程進学決定前からクラブで認知症の方を対象としたパーティーのボランティアの機会を与えてくださるなど、いつも親身に接して下さいます。Eastbourne での地区大会では、ご夫妻で観光地である海岸沿い (Sussex Heritage Coast) を車で案内して下さり、その後ロンドンまで車で送って下さいました。12



(写真) Rotary Club of Streatham のクリスマス会の様子。手前の赤いコートのご婦人が現地ホストの Chan 氏

月に入ってもクラブの朝食会やクリスマス会などに招いて下さいました。この後クリスマスには泊りがけでイベントのボランティアをする機会があります。Chan 様にこのような機会を提供していただいていることで自分のロンドンでの生活が豊かになっているのは明らかです。12 月中旬には Eastbourne のロータリー地区大会でお知り合いになったロータリアンの方のご縁で Rotary Club of Tooting にて昼食会の参加と”I,

Hiroshima and the world”というテーマでプレゼンテーションをさせていただく機会がありました。主なトーク内容は、私が大学卒業後に、ウクライナのチェルノブイリ原子力発電所を訪れて感じたことやパレスチナ紛争についてです。またそれ関連して、ヒロシマの紛争地域への希望 (hope) 発信についてお話ししました。私の祖母と祖父が被爆者であることであることから、祖母の被爆証言やそれについて感じたこともそれに交えてお話ししました。その他、私自身がヒロシマと世界の媒介となるための自己成長の必要性をお話ししました。具体的には、現在は運よくロータリーの奨学生として、ヒロシマと世界を直接つなぐ役目をいただいているが、そのような役割に今後も従事するには努力と成長が不可欠であるという趣旨です。

実際、このような機会でお話をさせていただくこと自体望んでも滅多に叶わないことですし、今回国際ロータリー第 2710 地区から奨学生としてロンドンに派遣していただいたことは感謝に尽きません。私をロータリーの奨学生として認めてくださった国際ロータリー第 2710 地区とスポンサークラブである広島東ロータリークラブの皆様には心の中でいつも感謝をいたしております。



(写真) Rotary Club of Tooting にて、トーク終了後に

直面している課題と今後の目標について

私は大学の事前英語コース参加のためロンドンに 5 月下旬から移りましたが、こちらで常に感じるのは、慢性的な時間不足です。私の住んでいるロンドン大学の寮は格安である代わりにロンドンの中心部から離れた zone-3 に位置しています。そのため大学に通うにはバスと地下鉄でおよそ一時間かかります。このことは時間の不足に大きく影響しているように思います。また、修士課程は来年 9 月までで終了しますが、1 年間という限られた時間の中ではとても国際感覚や、勉学・言語・文化理解を出来るようになれるとは思いません。毎日限られた時間の中で積極的に上記の活動などに参加していますが、それだけでは素晴らしいロンドンの文化であったりライフスタイルであったりを吸収でき

ないのではと感じます。そのため、現在は第 2 セミスター以降のインターンシップの機会を模索しています。現時点では留学期間からしても自分の国際感覚は限られているかもしれませんが、国際舞台で働ける人材になりたいとの思いからインターンシップなどのチャンスをうかがっているところです。

また、第一セミスターを終了した時点で抱いた感想として将来的な博士課程への進学です。周りのほとんどの学生が将来の PhD 取得を考えている中、自分にとっても将来の PhD 取得は必然的な選択になったように思います。PhD 進学条件にもしばしばあるようですが、学部から修士に直接進学した私にとって社会人経験は自分にとって重要と思いますのでインターンなどを通じての関連する分野への就職など考えています。

論文を仕上げなければならないというプレッシャーは常にありますが、効率的な時間配分でエッセーを作成し、今後なるべく社会的に活動していけたらと思います。ロンドンは半年を過ごただけでは分からないことだらけの連続ですが、街やキャンパスでロンドンナーとの交遊を深めることこそが、それに対する解決策になるかと思えます。Eastbourne 地区大会のロータリアンの方の奨学生に対するお言葉の中で“紙の上では平和等実現できない。人と交わりなさい。”というお言葉を拝聴いたしました。また、前述のように紛争解決学科の教員の方々も、人との関わりを大変重視しておられます。このことから、紛争解決分野においては人とのかかわりが大切であると感じる今日この頃です。ですから今後も大学やロータリーの活動機会を通して積極的に“インタラクト”し、それを私自身の国際人としての成長に繋げていければと思います。



(写真) Eastbourne で開催された 1130 地区地区大会でのグローバル補助金奨学生の集合写真